

森
鷗
外

二
人
の
友



二人の友

私わたくしは豊前ぶぜんの小倉こくらに足掛三年いた。その初はじめの年の十月であつた。六月の霖雨りんうの最中さいちゆうに来て借りた鍛冶町かじまちの家で、私は寂しく夏を越したが、まだその夏のなごりがどこやらに残っていて、暖い日が続いた。毎日通う役所から四時過ぎに帰つて、十畳ばかりの間まにすわっていると、家主いえぬしの飼う蜜蜂みつばちが折々軒のあたりを飛んで行く。二台の人力車がらくに行き違うだけの道を隔てて、向いの家で糸を繕よる墅車いとぐるまの音が、ぶうんぶうんと聞える。糸

を繕っているのは、片目の老処女で、私の所で女中が宿に下がった日には、それが手伝に来てくれるのであつた。

或る日役所から帰つて、机の上に読みさして置いてあつた Wundt の心理学を開いて、半ペエジばかり読んだが、気乗がせぬので止めた。そしていつもの墅車の音を聞いてぼんやりしていた。

そこへ女中が知らぬ人の名刺を持って来た。どんな人かと問えば、洋服を著た若い人だと云う。とにかく通せと云うと、すぐにその人が這入つて来た。

二十を僅わずかに越した位の男で、快活な、人に遠慮をせ

ぬ性^{たち}らしく見えた。この人が私にそう云う印象を与えたのは、多く外国人に交^{まじわ}つて、識^しらず知らずの間に、遠慮深い東洋風を棄てたのだと云うことが、後に私にわかつた。

初対面の挨拶が済んで私は来意を尋ねた。この人の事を私はF君と書く。F君の言う所は頗^{すこぶ}る尋常に異なるものであつた。君は私とは同じ石見人^{いわみじん}であるが、私は津^つ和野^{わの}に生れたから亀井家領内^{かめい}の人、君は所謂天領^{いわゆる}の人である。早くからドイツ語を専修しようと思ひ立って、東京へ出た。所々の学校に籍を置き、種々^{いろいろ}の教師に贄^{にえ}を執

って見たが、今の立場から言えば、どの学校も、どの教師も、自分に満足を与えることが出来ない。ドイツ人も汎^{ひろ}く交際を求めて見たが、丁度日本人に日本の国語を系統的に知った人が少いと同じ事で、ドイツ人もドイツ語に精通してはいない。それから日本人の書いたドイツ文や、日本人のドイツ語から訳した国文を涉^{しやうりよう}猟^{うち}して見たが、どれもこれも誤^ご謬^{びゆう}だらけである。その中でF君は私が最も自由にドイツ文を書き、最も正確にドイツ文を訳すると云うことを発見した。しかし東京にいた時の私の生活はいかにも繁劇らしいので、接近しようと思わず

にいた。その私が小倉へ来た。そこで君はわざわざ東京から私の跡を追って来た。これから小倉にいて、私にドイツ語を学びたいと云うのである。

これを聞いて私はF君の自信の大きいのに驚き、又私の買い被^{かぶ}られていることの甚^{はなはだ}しいのに驚いて、暫^{しばら}く君の顔を見て黙っていた。後に思えば気の毒であるが、この時は私の心中に、若^もし狂人ではあるまいかと云う疑さえ萌^{きん}していた。

それから私は取敢^{とりあえ}ずこんな返事をした。君は私を買い被っている。私はそんなにえらくはない。しかし私の事

は姑しばらく措おくとして、君は果して東京で師事すべき人を求めることの出来ぬ程、ドイツ語に通じているか。失敬ながら私はそれを疑う。こう云いつつ、私は机の上にあった Wundt を取って、F君の前に出して云った。これは少し専門に偏かたよった本で、単にドイツ語を試験するには適していぬが、若もしそれでも好いなら、そこで一ぺエジ程読んで、その意味を私に話して聞かせて貰もらいたい。若たし他の本が好いなら、小説もあり雑誌もあるから、その方にしようと言った。

F君は私の手から本を受取って、題号を見た。そして

「心理学ですね」と云った。

「そうだ。君それが読めるか」

「読めないことはありますまい。この本の事は聞いていただけで、まだ見たことはなかったのです。しかし私が Paedagogik を研究した時、どうしても心理学から這入らなくては駄目だと思って、少し心理学の本を覗いて見たのぞことがあります。どこを読みましよう」こう云って本をひるがえ翻ひるがえしているうちに、巻末に近い Die Seele と云う一章が出た。「そこを少し読んで聞かせ給え」と、私は云った。

F君は少し間の悪そうに、低い声で五六行読んだ。声は低いが発音は好い。すらすらと読むのを私は聞いていて、意味をはつきり聴き取ることが出来た。

「もう好いから、君その意味を言って聞かせ給え」と、私は云った。

F君は殆どほん術語のみから組み立ててある原文の意味を、苦もなく説き明かした。

私は再び驚いた。F君は狂人どころでは無い。君の自信の大きいのは当然の事である。私は云った。

「それだけ読めれば、君と僕との間に、何の軒けん軽ちすべき

所も無いね」

「なに。そんな事はありません。追々質問します」と、
F君は云った。

これでF君が漫みだりに大言莊語そうごしたのでないと云う事だけはわかった。しかしそれ以外の事は、私のためには総すべて疑問である。私はこの疑問を徐々に解決しようと思つた。只その中ただうちに急に知らなくてはならぬ事が一つある。それはF君の生活状態である。身の上である。

私はこう云った。「それは君のドイツ語を研究する相談相手になれと云うことなら、僕はならないことはない。

ところで君はどうして小倉で暮して行く積りだ」こう云ったが、F君は黙っている。私はすぐに畳み掛けて露骨に云った。「君金があるのか」

F君は黙ってはいられなくなつた。「金は東京から来る汽車賃に皆使つてしまつたのです。国から取れば、多少取れないこともありませんが、目前の用には立ちません。当分あなたの所に置いて下さるわけには行きますまいか」

この詞ことばは私の評価に少からず影響した。F君のドイツ語の造詣ぞうけいは、初め狂人かとまで思った疑を打ち消して、

大いに君を重くしたのに、この詞は又頗る君を軽くした。固より人間は貧乏だからと云つて、その材能の評價を減ずることはない。しかしF君が現に一銭の貯もなくて、私をたよつて来たとする、前に私を讃めたのが、買被りでなくて、世辞ではあるまいか、阿諛ではあるまいかと疑われる。修行しようとする望に、寄食しようとする望が附帯しているとすると、F君の私を目ざして来た動機がだいぶ不純になってしまう。人間の行為に全く純粹な動機は殆ど無いとしても、F君の行為を催起した動機は、その不純の程度が稍甚しくはあるまいかと疑

ややなはだ

すこぶ

さいのう

たくわえ

あゆ

ほ

われる。

これまで私に従学したいと云つて名告り出た人に、F君のような造詣のあつたことは曾て無い。この側から見れば、F君は奇蹟である。しかしこれまで私の家に寄食したいと云つて来た人に、一文の貯もなかつたことは幾らでも有る。この側から見ればF君は平凡な徼幸者である。そう云う徼幸者を遇する道は、私のためには熟路である。私はこの熟路を行くに、奇蹟たる他の一面を顧慮して、多少の手加減をすれば好いのである。

私は決して徼幸者に現金をわたさない。これが徼幸者

に對する一つの原則である。そこで私はF君にこんな事を言った。君はドイツ語が好く出来る。私の君を知っているのは只それだけである。それだけでは、君と同居しようとはまでは、私には思われない。そこで私は君を、私の心安い宿屋に紹介する。宿屋では私に對する信用で、君を泊らせて食わせて置く。その間に私は君のために位置を求めゐる。それも、君だけの材能があつて見れば、多少の心こころあたり当がないでもない。若しうま旨く行つたら、君は自らか贏ち得た報酬で宿屋の勘定をするが好い。それが旨く行かず、又故郷からも金が来なかつたら、宿屋の勘定だ

けを私が引き受ける。私にはそれ以上の約束は出来ない。それで好いかと、私は云った。

F君は私の詞ことばを聞いて、少し勝手が違うように、予期に反したように感じたらしかつたが、とにかく同意した。多分君は私が許諾するか、拒絶するかと思っていただろう。それに私の答は許諾でもなければ、拒絶でもなかつたから、君のためには意外であつたかと思われる。とにかく君は、格別難有ありがたがる様子もなく、私に同意した。私は使を遣やつて下役の人を呼んで、それに用事を言い含めた。そしてF君を連れて、立見たつみと云う宿屋へ往かせ

た。立見と云うのは小倉停車場に近い宿屋で、私がこの土地に著ついた時泊った家である。主人は四十を越した寡か婦ふで、狆ちんを可哀がっている。怜れい悌りで、何の話でも好くわかる。私はF君をこの女の手に托したのである。

私がF君に多少の心こころあたり当あたりがあると云ったのは、丁度その頃小倉に青年の団体があつて、ドイツ語の教師を捜していたからである。そこで早速その団体の世話人に話し

て、君を聘^{へい}することにさせた。立見の勘定は私が払わなくても好いことになった。

F君は殆^{ほとんど}毎日のように私の所へ遊びに来た。話はドイツ語の事を離れぬが、別に私に難問をするでもない。

^{あらた}新に得た地位に安んじて、熱心に初学者にドイツ語を教える方法を研究して、それを私に相談する。そう云う話を聞くうちに、私は次第に君と私とのドイツ語の知識に大分相違のあることを知った。それは互に得失があるのである。君は語格文法に精^{くわ}しい。文章を分析して細かい事を言う。私はそんな時に始て聞く術語に出くわして

驚くことがある。しかし君の書いたドイツ文には漢学者の謂いう和習がある。ドイツ人ならばそうは云わぬと、私が指し全てする。君が服せぬと、私は旅中にも持もっている。版の Goethe などを出して証拠立てる。こんな応対がなかなか面白いので、私も君の来るのを待つようになった。

天気の良い土曜、日曜などには、私はF君を連れて散歩をした。狭い小倉の町は、端から端まで歩いて歩あき足らぬので、海岸を大里だいりまで往いったり、汽車に乗って香椎かしいの方へ往いったりした。格別読む暇もないのに、君はいつ

も隠しにドイツの本を入れて歩く。Goeschen 版の認識論や民類学などである。なぜかと問うと、暇があったら読もうと思うのが楽しみだと、君は答える。ひどく知識欲の強い人である。

二三週間立ってから、或る日私はF君がどんな生活をしているかと思って、役所からの帰掛かえりがけに立見をおとずれた。丁度お上かみさんが門口から一匹の小犬を逐おい出しているところであった。「どうも内の狎ちんが牝めすだもんですから、いろんな犬が来て困ります」と云って置いて、「畜生畜生」と顧み勝に出て行く犬を叱っている。狎は帳場

から、よそよそしい様子をして見ている。

「F君はどうしていますか」と、私は問うた。

「あなたがお世話をなさるだけあって、変わった方でございますね」と、お上さんは笑顔を^{えがお}して云った。

「わたくしが世話をするだけあって変わっているのです。それは困るなあ。一体どう変わっています」こう云いつつ、私は帳場の前に腰を掛けた。

「いいえ。大そう好い方でございますが、もうこんな朝晩寒くなりましたのに、まだ^{ひとえもの}単物一枚でいらつしやいます。寒い時は、上からケツトを被って本を読んでい

らっしやるのでございます」お上さんは私に座布団ざぶとんを出して、こう云った。

「はてな。工面が悪いのかしら」ひとりごと 独言のように私は云った。

「そうじゃございません。お泊お泊になってから少し立ちますと、今なら金があるからと仰おつしやつて、今月末までの勘定を済ませておしまいになつた位でございます」もう十一月に入っているから、F君は先月青年団から貰った金で前払をしたのである。

とにかく逢あつて見ようと思つて、私は二階へ上がった。

立見の家では、奥の離座敷はなれに上等の客を留めることにしている。次は母屋おもやの中庭に向いた二階である。表通に向いた二階の小部屋は、細かい格子こうしの窓があつて、そこには客を泊らせない。F君は一番安い所で好いと云つて、そこに落ち著いた。

「F君、いるかね」と云つて声を掛けると、君は内から障子を開けた。なる程フランネルのシャツの上に湯帷子ゆかたを著ている。細かい格子に日を遮かきられた、薄暗い窓の下もとに、手習机の古いのが据えてあつて、そこが君の席になつている。私は炭団たどんの活けてある小火鉢はきを挟んで、君と

対坐した。

この時すぐに目を射たのは、机の向側に夷麦酒の空箱がたてに据えて本箱にしてあることであつた。しかもその箱の半なかば以上を、茶褐色の背革の大きい本三冊が占めていて、跡は小さい本と雑記帳とでうま填っている。三冊の大きい本は極ごく新しい。薄暗い箱から、背革に印いんしてある金字が光を放っている。私は首を屈かがめて金字を読もうとした。

「Meyerの小ですよ」と、F君が云つた。

「そうか。ひどく立派な本になつたね。それに僕の持つ

ているのは二冊物だが」

「それは古いのです。これは南江堂に来たのを見て置いたから、郵便為換かわせを遣やって取り寄せました」

「しかしこんなに膨脹しては、名は小でも、邪魔になるね。なぜわざわざ取り寄せたのだ」

「なに。教師をしていると、人名や地名の説明を求められますから、この位な本がないと、心細いのです」

F君と私とは会話辞書の話をした。Meyer と Brockhaus との得失を論ずる。こう云うドイツの本が Larousse や Britannica と違ちがう所以ゆえんを論ずる。俗書が段々

科学的の書に接近して来る風潮を論ずる。とうとう私はランプの附くまでいて歸つた。

私は借家に歸ると、古^{ふる}裕^{あわせ}を一枚女中に持たせて、F君の所へ遣つた。五十日分の宿^{しゅくりよう}料を払って、会話辞書を買つては、君の貰つた月給は皆無くなつて、煙^{たばこ}草もやたらには吞まれぬわけだと思つたからである。

私はF君に徼幸者の一面があると思つていたので、最

初から君と交るに、多少の距離を保留して置くようにした。しかし相識そうしきになつてから時が立つに従つて、この距離が段々縮まつて来た。

それには衣食に事を闕かいても書物を買うと云う君の学問好を認めためもあるが、決してそればかりではない。ドイツ語に於おける君の造詣の深いことは、初対面の日にもう知れていた。そうして見れば、君が学問好だと云うことは、問わずして明かなわけである。

F君と私との距離を縮めた、主おもな原因は私が君の「童貞」を発見した処に存ずる。君が殆ど異性に関する知識

を有せぬことを発見した処に存ずる。これは或は私の見^み錯^{あやま}りであつたかも知れない。しかし私は今でも君に欺かれたとは信ぜない。

私はF君に秘密が無かつたとは思わない。又君が洵^{うそ}を衝^つかなかつたとは思わない。しかし君は故^{こと}らに構^{かま}えて洵を衝く人ではなかつたらしい。洵のために詞^{ことば}を設ける程の面倒をせぬ人であつたらしい。私と対坐して構えて洵を衝いて見るが好い。私はすぐに強烈な反感を起す。これは私の本能である。私はこの本能があるので、余り多く人に欺かれない。多数の人を陥れた詐偽師を、私が

一見して看破したことは度々たびたびある。

これに反して義務心の闕かけた人、amoral な人、世間で当にならぬと云う人でも、私と対坐して赤裸々に意志を発表すれば、私は愉快を感ずる。私は年久しくそう云う人と相忤あいさからわずに往来おうらいしたことがある。

さて私は前にも云った通りに、最初から徼幸者を以もつてF君を待った。しかし君の対話は少しも私に反感を起させたことが無い。君の言語は衝動的である。君の胸臆きょうおくは明白に私の前に展開せられて時としては無遠慮を極めることがある。Verblüffend に真実を説くことがある。

私はいつもそれを甘んじ受けて、却かえって面白く感じた。

殆ど毎日逢って、時としては終日一しよにいることさえあるので、F君と私との話はドイツ語の事や哲学の事には限らぬようになった。或る日私は君にこう云う事を言った。私はこの土地で役をしていて多くの人に知られている。その人達がもうF君をも知って来た。そして二人を兄弟だと云うそうである。本通の雑貨店徳見に往つたら、「弟御さんも店へお出いでになりました」と、主人が云った。誰だれの事かと思つて問えば、君の事である。同国ではあるが、親類ではないと、私は答えた。主人は不審

に思ふらしい様子で、「へえ、あんなに好く肖にてお出になつて」と云つた。私は君に似ているだろうか、君はどう思ふと云つて、F君を見た。

F君がその時、それは他人の空似と云うことが随分有るものと見えると云つて、こう云う話をした。君が尾の道に泊つた晩の事である。中庭を囲んだ二階の一方にある座敷に、君は入れられた。すると二階の向側むこうがわに泊つた客が、芸者を大勢呼んで大騒をしていた。君は無聊ぶりように堪たえぬので、廊下に出て向うを見る。向うでも芸者が一人出て、欄干らんかんに手を掛けてこつちを見る。その芸者が連つれ

の芸者を呼び出す。二人で何かささやいてこつちを見る。こつちで見るのは好いが、向うから見られるのは厭いやだと思つて、君は部屋に這入つた。向側の騒ぎは夜遅くなるまで続いた。君は床に這入つて、三味線の声をやかましく思いつつ寐ね入いつた。暫く寐ねているうちに、部屋に人が来たように思つて目を醒さました。見れば芸者が来て枕元まくらもとにすわっている。君は驚いて起き上がった。そして「どうしたのだ」と問うと、「少し伺うかがいたい事がございます」と云う。君は立って夜具を畳んだ。それから芸者に用事を尋ねた。芸者の口上はこうであつた。自分は向側の座

敷に、大勢来て泊っている芸者の中の一人である。この土地の生れで、兄が一人あつた。それが家出をして行方が知れずにいる。然るに先刻向側からあなたを見て、すぐにその兄だと思つた。分れてからだいぶ年が立つたが、毎日逢いたい逢いたいと思うので、こつちでは忘れずにいる。あなたを見た時、すぐに馳けて来ようかと思つたが、人目があるのでこらえていた。若し人違であつたら、許して貰いたい。恋しい兄だと思ふ人を見たのに、逢つて物を言わずに別れては、後々まで残惜しい。一体あなたはどちらのお方かと云うのであつた。君はこう答

えた。「それは気の毒な事だ。僕は石州のもので、尾の道へは始て来た。ここへ来たのが知れるといけないから、早く帰るが好い」と云つたと云うのである。

F君のこの話を、私は面白く思つて聞いた。私の悟性から見れば、初め君が他人の空似は有るものだと言つたのは反語でなくてはならない。芸者が臥所ふしどへ来た時、君は浜路はまじに襲われた犬塚信乃いぬづかしののように、夜具を片付けて、開き直つて用向を尋ねた。さて芸者の詞を飽くまで真面まじ目にめ聞いて、旨く敬して遠ざけたのである。君が語り畢おわる時、私は君の面おもてを凝視して、そこに Ironie の表情を

求めた。しかしそれは徒事いたずらごとであつた。

F君は芸者の詞を真実だと思つて、そのまま私に話したのであつた。私は驚いた。そして云つた。「日本の女は横着なようで、おとなしい。それが西洋人であつたら、きつと肉迫して来たのだ。すると君だつて、WilhelmがPhileneの胸を押し退のける勇気がなかつたように、女のとりこ俘になるのだった」

私がこう云うと、今度はF君が驚く番になつた。後に聞けば、或る西洋人に戒められて、小説と云うものを読まぬ君も、Wilhelm Meister や Geisterseher 位は知つて

いたので、私の詞を聞いて、白内障の手術を受けたように悟ったのだそうである。

この事があってから私は、F君の異性に対する言動に、細かに注意した。そして君がこの方面おいに於て全く無経験であることを知った。君は衣食けつぼうの闕乏を憂えない。君は性慾を制している。君は尋常の徼幸者とは違う。君はとにかくえらいと、私は思った。そこで初め君との間に保留して置いた距離が次第に短縮するのを、私は妨げようとはしなかった。私の鑑識は或は錯あやまっていたかも知れない。しかし私は今でも君に欺かれたとは信ぜない。

十二月になった。私が小倉に来てから六月目、F君が私の跡を追って来てから三月目である。私はフランス語の稽古を始めて、毎日夕食後に馬借町ばしやくまちの宣教師の所へ通うことになった。

これが頗る私と君との交際の上に影響した。なぜかと云うに、君が尋ねて来ても、私はフランス語の事を話すからである。君は、「フランス語も面白いでしょうが、

僕は二つの語を浅く知るより、一つの語を深く知りた
いのです」と云う。「また一説だね」と、私は云う。この
背面には、そうばかりは行かぬと云う意味がある。君は
それを察する。そして多少気まずく思う。その上余り頻
りに往来した挙句に、必然起る厭倦えんけんの情も交って来る。
そこで毎日来た君が一日を隔てて来るようになる。二日
を隔てて来るようになる。譬たとえて言えば、二人は最初遠
く離れた並行線のように生活していたのに、一時その距
離が逼り近づいて来て、今又近く離れた並行線のように
生活することになったのである。

F君はドイツ語の教師をして暮す。私は役人をして、
かたわら 旁 フランス語を稽古して暮す。そして時々逢つて遠慮
のない話をする。二人の間には世間並の友人関係が成り
立ったのである。

翌年になつた。四月の初にF君が来て、父の病気のた
めに帰省しなくてはならぬから、旅費を貸して貰いたい
と云つた。幾らいるかと云えば、二十五円あれば好いと

云う。私はすぐに出してわたした。もう徼幸者扱にはしなかつたのである。この金の事はその後私のちも口に出さず、君も口に出さずにしまった。私は返して貰うことを予期しなかつたのである。君は又そんな事に拘泥せぬ性分であつたのである。これは横著な中でも、しらばっくれたのでもない、私は思っていた。年久しく交際した君が、物質的に私を煩わづらわしたのは只これだけである。

程なくF君は帰つて来て、鳥町とりまちに下宿した。そしてこれまでのようにドイツ語の教師をしていた。夏の日には一度君を尋ねて、ラムネを馳走ちそうせられたことがある。

年の暮に鍛冶町の家主いえぬしが急に家賃を上げたので、私は京町へ引き越した。墅車いとぐるまの音のする家から、大鼓の音のする家に移ったのである。京町は小倉の遊女町の裏通になっなっていて、絶えず三味線と大鼓とが聞きえていた。この家へもF君は度々話はしに来きた。

又年が改かまった。私が小倉にき来てからの三し年ねん目めである。八月の半頃はんぐらに、F君は山口高等学校に聘へいせられて赴任しゆじんした。

その又次の年の三月に、私は役やくがわらいて東京へ帰かった。丁度四年目に小倉の土地を離はなれたのである。

私は無妻で小倉へ往って、妻を連れて東京へ帰った。

しかし私に附いて来た人は妻ばかりではなくて、今一人
すぐに跡から来た人がある。それはまだ年の若い僧侶で、
私の内では安国寺さんあんこくじと呼んでいた。

安国寺さんは、私が小倉で京町の家に移した頃か
ら、毎日私の所へ来ることになった。私が役所から帰っ
て見ると、きつと安国寺さんが来て待っていて、夕食の

時までいる。この間に私は安国寺さんにドイツ文の哲学入門の訳読をして上げる。安国寺さんは又私に唯識論ゆいしきろんの講義をしてくれるのである。安国寺さんを送り出してから、私は夕食をして馬借町の宣教師の所へフランス語を習いに往った。

そんな風であったから、私が小倉を立つ時、停車場に送ってくれた同僚やら知人やらは非常に多かったが、その中で一番別わか惜かれんだものは安国寺さんであった。「君がいなくなつては、安国寺さんにお気の毒だね」と、知人はからかい揶揄半分に私に言った。

果して安国寺さんは私との交際を絶つに忍びないの
で、自分の住職をしていた寺を人に譲って、飄然ひようぜんと小
倉を去った。そして東京で私の住まう団子坂上の家の向
いに来て下宿した。素もと私の家の向いは崖がけで、根津ねづへ続
く低地に接しているのです、その崖の上には世に謂いう猫の
額程の平地しか無かった。そこに、根津が遊廓ゆうかくであつた
時代に、八幡楼やはたろうの隠居のいる小さい寮があつた。後にそ
れを買い潰つぶして、崖の下に長い柱を立てて、私の家と軒
が相對するような二階家の広いのを建てたものがある。
眺望の好かつた私の家は、その二階家が出来たために、

陰気な住いになった。安国寺さんの来たのは、この二階造の下宿屋である。

しかし東京に帰った私の生活は、小倉にいた時とは違って忙しい。切角来た安国寺さんは前のように私と知識の交換をすることが出来ない。それを残念に思っている。と、丁度そこへF君が来て下宿した。東京で暮そうと思つて、山口の地位を棄てて来たと言ふことであつた。

そこで安国寺さんは哲学入門の訳読を、私にして貰う代りに、F君にして貰おうとした。然るに私とF君とは外国語の扱方が違う。私は口語でも文語でも、全体とし

て扱う。F君はそれを一々語格上から分析せずには置かない。私は Koeber さんの哲学入門を開いて、初のペエジから字を逐^おって訳して聞せた。しかも勉^{つと}めて仏經の語を用いて訳するようにした。唯識を自在に講釈するだけの力のある安国寺さんだから、それを丁度尋常の人が Fibel や読本を解^{がえん}するよう^に解した。F君はこの流義を踏襲^{がえん}することを肯^{がえん}ぜずに、安国寺さんに語格から教え込もうとした。安国寺さんは全く違った方面の労力をしなくてはならぬので、ひどく苦んだ。

暫く立って、F君は第一高等学校に聘せられたが、や

はり同じ下宿にいて、そこから程近い学校へ通うので、君と安国寺さんとの関係は故もとのままであつた。

私が東京に帰ってから、桜が咲き桜が散つて、気候は暖いと云う間もなく暑くなつた。二階に登つて向いの下宿屋を見れば、そこでも二階の戸を開け放っている。間数が多いのでF君や安国寺さんのいる部屋は見えない。見えるのは若い女学生のいる部屋である。

欄干に赤い襟裏えりうらの附いた著物きものや葡萄茶えびちやの袴はかまが曝さらしてあることがある。赤い袖の肌襦袢はだじゆばんがしどけなく投げ掛けであることもある。この衣類ぬしの主が夕方には、はでな湯ゆ帷子かたを著て、縁端えんばなで涼んでいる。外から帰って著物を脱ぎ更かえるのを不意に見て、こっちで顔を背そむけることもある。私はいつとなくこの女の顔を見覚えたが、名を聞く折もなく、どこの学校に通うと云うことを知る縁もなかつた。女は美しくもなく、醜みにくくもなく、何一つ際立きわって人の目を惹ひくことのない人であった。

向いの家の下宿人は度々入り替ると見えて、見知った

人がいなくなり、新しい人じんが見えるのに気の附くことがあつた。しかしF君と安国寺さんとは外へ遷うつらずにいた。私の家の二階から見える女学生も遷らずにいた。

一年余立って、私が東京へ帰ってからの二度目の夏になつた。或る日安国寺さんが来て、暑中に帰省して来ると云つた。安国寺さんは小倉の寺を人に譲つたが、九州鉄道ほうしゅうせんの豊州線の或る小さい駅に俗縁の家がある。それ

を見舞いに往くと云うことであつた。

安国寺さんの立った跡で、私の内のものが近所の噂うわさを聞いて来た。それは坊さんはF君の使に四国へ往つたので、九州へはその序ついでに帰るのだと云うことであつた。使に往つた先は、向いに下宿している女学生の親元である。F君は女学生と秘密に好いい中になつていたが、とうとう人に隠されぬ状況になつたので、正式に結婚しようとした。それを四国の親元で承引しない。そこで親達を説き勧めに、F君が安国寺さんを遣やつたたと云うのである。私はそれを聞いて、「安国寺を縁談の使者に立てたと

すると、F君はお大名だな」と云った。無遠慮な Egoist たるF君と、学徳があつて世情に疎^{うと}く、赤子^{せきし}の心を持つてゐる安国寺さんとの間でなくては、そう云うことは成り立たぬと思つたのである。

安国寺さんの誠は田舎^{いなか}の強情な親達を感動させて、女学生はF君の妻^{さい}になることが出来た。二人は小石川に家を持つた。



又一年立った。私はロシアとの戦争が起ったので、戦地へ出発した。F君は新橋の停車場まで送って来て、私にドイツ文で書いたロシア語の文法書を贈った。この本と南江堂で買ったロシア、ドイツの対訳辞書とがあつたので、私は満洲にいる間、少からぬ便利を感じた。

私が満洲で受け取った手紙のうちに、安国寺さんの手紙があつた。その中うちに重い病氣のためにドイツ語の研究を思い止とまつて、房州辺の海岸へ転地療養に往くと云うことが書いてあつた。私はすぐに返事を遣つて慰めた。これは私の手紙としては最もつとも長い手紙で、世間で不治ふちの

病やまいと云うものが必ず不治だと思つてはならぬ、安心あんじんを
 得ようと志すものは、病のために屈してはならぬと云う
 ことを、譬諭ひゆだん談のように書いたものであつた。私は安国
 寺さんが語学のために甚だしく苦んで、その病を惹き起
 したのではないかと疑つた。どんな複雑な論理をも容易たやす
 く辿たどつて行く人が、却つて器械的に諳そらんじなくてはなら
 ぬ語格の規則に悩まされたのは、想像しても氣の毒だと、
 私はつくづく思つた。

満洲で年を越して私が凱旋がいせんした時には、安国寺さんは
 もう九州に歸つていた。小倉に近い山の中の寺で、住職

をすることになったのである。

F君は相変わらず小石川に住んで、第一高等学校に勤めていた。君と私との忙しい生活は、互に訪問することを許さぬので、私は時々巢鴨すがも三田線の電車の中で、君と語ごを交えるに過ぎなかった。

それから四五年の後に私は突然F君の訃音ふいんに接した。咽頭いんとうの癌腫がんしゅのために急に亡くなったと云うことである。

日本文学電子図書館

山椒大夫・高瀬舟

著 者：森 鷗外

作成者：宮澤一郎

出版社：新潮文庫、新潮社



日本文学電子図書館